

# 2025 年度 入学試験問題

## 国 語

### (帰国生入試)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、  
解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の関係上、一部本文等の表記を改めます。）

縄文時代（じよもん）の人びとが生活の糧（かて）を堅果類（けんか）に求めていたことは、考古学的な調査だけではなく、最新の科学的分析（ぶんせき）から動かしがたい事実となりつつあるが、なぜ木の実が縄文人の主要食料となつたのだろうか。

堅果類（けんか）という名称（めいしょう）はそれこそ堅苦しい（かたくる）表現であり、なじみやすい言葉（ことば）に置き換（か）えるなら、それはおおよそ「ドングリ」と呼ばれているものに該当（がいとう）すると言ってよい。ドングリと言（い）えば、一般的（いっぱん）には童謡（どうよう）でも歌われているようにクヌギの実を指す場合が多いが、本来は、クヌギ、カシ、ナラ、カシワ、クリなどのブナ科果実の総称なのである。このドングリ類は日本列島の各地の森林相に広く分布しており、たとえば落葉広葉樹にはブナ属（ブナ、イヌブナ）、クリ属（クリ）、コナラ属（コナラ、ミズナラ、クヌギ、カシワ）、また常緑広葉樹としてはアカガシ属（アカガシ、アラカシ、ハナガシ等）、シイノキ属（スダジイ、ツブラジイ）そしてマテバシイ属（マテバシイ、シリブカガシ）が見られる。① ドングリと聞いて、人によって違（ちが）ったイメージを持つ理由の一つは、実はこうした A にもその原因があつたのである。

ドングリを実らせるブナ科の植物は、日本列島のほぼ全域に広がっていると同時に、森林のなかの最も主要な樹種ともなっている点は見のがせない。注意深く観察すると、東日本地域に分布する落葉広葉樹林のなかではブナ、ミズナラの占（し）める割合が最も大きく、西日本地域の常緑広葉樹ではシイ・カシ類が圧倒的多数である。また、里山などのような人工的な環境変化（かんきやう）が見られる場所では、クヌギやコナラの出現率（きふん）が際立（きわ）っている。このようにドングリ類は広く列島の全域に分布するだけでなく、その種類も豊富であるうえに森林内の主要な樹種となっていたことも、② 縄文人が有用な植物資源として目を付けた理由であつたに違いない。

※ ところで 先にも述べたように、縄文時代の遺跡（いせき）は東日本地域に圧倒的多数が分布しており、そして当時の主食料がドングリ類であつた点も間違いない。しかしながら西日本に分布するスダジイやマテバシイ、ツブラジイは、苦みもなくそのまま食べることができるが、東日本のドングリ類は、ブナを除いていずれもタンニンやサポニンなどを含（ふく）むことから生食できないのである。縄文時代の遺跡集を考えると、生食できるドングリの分布によって人びとの生活が規定されていた可能性は低いと言わざるを得ない。クリやクルミだけではなく、渋（しぶ）くて生では食べられないドングリ類も食料リストに組み込んでいたからこそ、東日本地域に縄文遺跡が集中しているのであらう。苦みの成分であるタンニンは、灰水を使うことで取り除くことができるが、灰水を使わなくても砕（くだ）いて粉にした後で水にさらして煮沸（しやふつ）すれば食べることができる。遺跡からは例外なく相当量の ③ 敲石（たたきいし）や 磨石（すりいし）、石皿（いしひら）が発見されるうえ、縄文土器のほとんどが食料を煮炊（にた）きする時に

使われる深鉢形ふかばちであることは、これらの遺物はドングリ類を加工処理する大切な日常品であつたと考えて間違いないだろう。

そもそもなぜ縄文人が主要食料としてドングリを選び、食べ続けていたのであらうか。ドングリ類が他と比べて食料として優<sup>すぐ</sup>れている点を挙げるとすれば、まず最初に思い浮<sup>おも</sup>かぶのはその多様性である。たとえば関東地方を例にとつてみると、台地や丘陵部<sup>きやうりゆうぶ</sup>ではクヌギ、コナラ、シラカシ、山間部ではミズナラ、ブナ、加えて植生を超<sup>こ</sup>えてクリ、クルミ、川沿いにはもつぱらトチと  
いうように、多様な環境に適したドングリが各地に存在する。それぞれの地域で最も多く生育するドングリを中心<sup>ちゅうしん</sup>にいくつかの種類を組み合わせることで、安定的な食料となり得たのだらう。こうした普<sup>ふ</sup>遍<sup>へん</sup>性<sup>せい</sup>や多様性を持つ植物は、他には見当たらない。

多様性ばかりでなく、その **B** もドングリは際立っている。ドングリにも不作の年が数年周期で確認<sup>かくにん</sup>されてはいるものの、豊作の年には驚<sup>おどろ</sup>くほどに多量の実をつける。公園などでクヌギやコナラの木の下が、落下したドングリによって一面覆<sup>おほ</sup>い尽くされたようになった情景を目にした人も多いに違いない。近世まで木の実を食べていた北上山地や飛驒地方などの山里では、「一石トチ」「二石ナラ」と語<sup>かた</sup>り継<sup>つ</sup>がれた巨木<sup>きよぼく</sup>があつたが、これはいかにドングリ類の収獲量<sup>しゅうかくりょう</sup>が高かつたかを物語<sup>ものがたり</sup>っている。また、山村部では他村へと嫁<sup>よめ</sup>いだ娘<sup>むすめ</sup>にトチの木の所有権<sup>しゆけん</sup>を譲<sup>ゆず</sup>つたという話があるが、まさにトチなどは食料を生み出す大切な財産とみなされていたわけである。

③ 採集が狩猟や漁撈などと比べて簡便であつたことについても考えておかなくてはならない。シカやクマ、イノシシなどの狩猟は、数人の大人が確認、攻撃、追跡など、数日かけて行なう食料獲得の活動であつたが、ドングリの採集は目的の木がどこにあるかさえ知つていれば、それを拾うための特別な技術や経験は何ら必要なく、しかも子供から老人までが参加できるというメリツトがある。狩猟に限らず漁撈でも実に多くの道具を必要とするが、ドングリの採集に必要な道具といえはせいぜいカゴくらいであつたろう。何よりも狩猟・漁撈では目的とする獲物を手にする確率は低かつたが、採集活動ではそれがなく、労働に見合う収穫が約束されていた。今は遊びでしかないドングリ拾いは、かつては重要な食料調達の仕事でもあつたのである。大量に実を付けた年には、拾うのではなく「ホウキで集めた」り「両手ですくつた」りしたものだったという。拾うことよりもそれを運ぶ方がよほど大変だったと語る人は多い。

こうした収穫量の多さに加えて、食料としてのドングリ類の優れた点は、意外にもそのカロリーの高さにもあった。一般的に木の実というカロリーが低いと思われるが、これも知れないが、普通のドングリ類でも一〇〇グラムあたりの熱量は二〇〇〜三〇〇キロカロリーもある。これは同じく縄文人が食料として好んで採集した貝類（アサリ三〇キロカロリー、ハマグリ三八キロカロリー、カキ六〇キロカロリー）と比べてみると、その優位性がよくわかる。ドングリのカロリーは精米（三五六キロカロリー）にはやや劣るものの、それにほぼ匹敵すると考えても差し支えないのである。

また見落としてはならないのが、「回収効率」の問題である。狩猟のような直接的な食料獲得

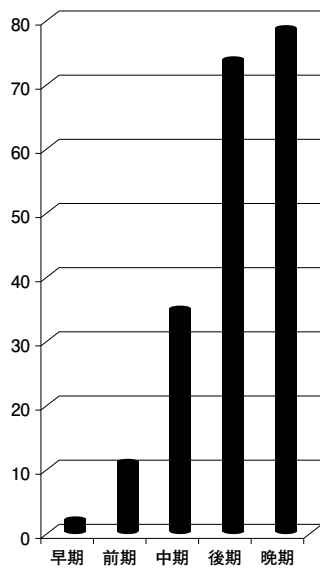
に比べて、ドングリ類の採集活動は、採集した場所から集落に持ち帰る労力、いわば回収にかかるコストが意外に重要な位置を占めている。つまり木の実や貝、山菜などは、採集場所が集落周辺に点在していることから、採集後に人びとが待つ集落へと持ち帰らなければ食料とはなり得ない。採集されたドングリ類のなかで不要となるのは殻<sup>から</sup>だけであり、他の八〇%ほどが食料となる。だが貝の場合は、貝殻が重量のほとんどを占めることから、可食部分は全体のわずかに二〇%程度にしかならず、残りの八割の重量を運搬<sup>うんぱん</sup>するコストはまったく無駄<sup>むだ</sup>となる。こうした回収効果からも、採集食料のなかでドングリ類が優位<sup>しやうゐ</sup>だったことが改めて理解されるのである。

最後に指摘<sup>しやうさ</sup>しておかなくてはならない点は、食料の保存という問題にある。ドングリ類は堅果類と呼ばれるだけあって、その外側を堅い殻で守られていることから、土中に埋<sup>う</sup>めたり、竪穴<sup>たてあな</sup>住居<sup>てんじやう</sup>の天床部<sup>てんじやうぶ</sup>で乾燥<sup>かんそう</sup>させておけば、数年どころか数十年にも及ぶ長期間の保存が可能となる。また、ドングリ類に含まれるタンニンなどの有害成分は、人間が食する時の障害になっただけでなく、虫害を防ぐ役割も持っている。採集食料は多量に収穫できてもそれが保存できなければ意味がなく、その意味でもドングリは長期の保存に適した食料であったのである。

ドングリは年によって豊作であったり不作であったり、収穫量が一定しないことから、縄文人は豊作の年に拾えるだけドングリを拾って貯蔵穴などに保存しておくことで、不作の年に備えていた。縄文集落を調査すると例外なくドングリ類を貯蔵した穴が発見されており、そうしたなかには、ドングリを穴いっぱいに詰め、樹皮や木片<sup>もくへん</sup>で覆いをした施設<sup>しせつ</sup>まで発見されている。数年後の不作を見すえて、常に食料<sup>たくわ</sup>を蓄えておくという、厳しい自然のなかに生きた縄文人の知恵<sup>ちえ</sup>とその計画性に触<sup>ふ</sup>れる思いがする。

日本列島各地で調査される遺跡からは数多くのドングリ類が出土しているが、最も発見例の多いのがクリとクルミ、そしてトチである。クリ、クルミについては生食できるうえ、味も良いことから縄文人が好んで食したことは理解できるが、サポニンを含み苦みが強くて生食できないトチの実がなぜクリ、クルミとともに主要な食料としての地位を獲得するに至ったのであろうか。

トチは人体に有害なサポニンを含むことから、アク抜き<sup>あくぬき</sup>（トチに灰や灰汁<sup>あくじゆ</sup>を混ぜてサポニンを除去する）技術の獲得なくしてはその利用はあり得なかった。しかしながら、アク抜き技術<sup>こんせき</sup>の痕跡<sup>こんせき</sup>は、考古学的な遺物や遺構としては残りにくいことから、未だ<sup>いま</sup>に縄文時代のどの段階でアク抜き技術が



図表 1 トチの時期別出土遺跡数

確立したかは不明である。ちなみに全国の遺跡から出土したトチを時期別に分けると、後・晩期はもちろんだが、中期の遺跡からの出土例も多い（図表1）。早期・前期に至っては少なく、確実な例もないことから、現在の段階ではトチのアク抜き技術が開始されたのは、縄文時代 C 段階とするのが最も妥当<sup>たとう</sup>と考えられている。

| 種類    | 長さ     | 幅      | 重量    | タンニン   | カロリー   |
|-------|--------|--------|-------|--------|--------|
| コナラ   | 23.8mm | 11.8mm | 1.9g  | 4.8    | 284cal |
| ミズナラ  | 21.2mm | 12.4mm | 1.8g  | 6.7    | 287cal |
| クヌギ   | 19.7mm | 19.8mm | 4.8g  | 1.3    | 202cal |
| アラカシ  | 14.5mm | 9.0mm  | 0.6g  | 4.4    | 235cal |
| イチイガシ | 20.1mm | 12.3mm | 1.2g  | 1.2    | 252cal |
| マテバシイ | 25.4mm | 14.4mm | 2.7g  | 0.5    | 236cal |
| クリ    | 24.1mm | 24.3mm | 4.8g  | —      | 156cal |
| トチ    | 30.5mm | 30.5mm | 21.1g | (サポニン) | 365cal |
| クルミ   | 34.1mm | 27.1mm | 7.5g  | —      | 673cal |
| (精米)  | —      | —      | —     | —      | 356cal |

※  
図表 2 堅果類の大きさとカロリー

アク抜き技術を獲得して本格的にトチを食料とし始めたのが、縄文時代の遺跡数が爆発的に増加している時期、つまり人口が著しく増えた中期であった点は重要である。アク抜き技術によってトチが食料リストへと組み込まれ、安定した食料自給を背景として人口が増えたのではないだろうか。トチが他のドングリに比べて際立って優れている点は、その大きさにもあったと考えるとよいだろう（図表 2）。楕円形の形態が多いドングリのなかで球形のトチは、大きさのみならずその重量も突出していて、クリ・クヌギの四倍、コナラやミズナラの一〇倍もの重量を持っている。加えて見過ごせないのが採集効率のよさである。畠山剛氏の実験では、同じ時間で拾ったコナラ、ミズナラ、トチの数量を比べると、それぞれ一对一・五対七となり、

④ 断然トチを拾った方が効率がよいことがわかっている。

また、トチの木がクリやクルミなどとは違って、樹齢を重ねても収穫量が落ちない点も見逃せない。クリは二〇〜三〇年をピークに収穫量が著しく落ちてしまうが、トチにはそれがない。しかもトチは沢沿いの傾斜面に群生する場合が多く、落下したトチの実が転がって沢水のたまった場所や平場に、重なるように集まる。その大きさも含めて、採集にはこれ以上はないというくらいに好都合な木の実がトチなのである。トチは他のドングリに比べてカロリーが高く、この点も加味すれば、縄文人にとってアク抜きという手間をかけてもトチを食料とするのには大きなメリットがあつたのである。

（栗島義明「森の資源とその利用」より）

※先にも述べたように……問題文より前の部分で説明がされている。

※敲石……ドングリなどの外皮を除去するために使用する石器。

※磨石……ドングリなどをすりつぶすための製粉用の石器。

※カロリー……カロリーは一〇〇グラムあたりの数値。単位はキロカロリー。

問 1 空らん A ・ B にあてはまる最もふさわしいことばを文中からそれぞれ漢字三字で抜き出さない。

問2 — 線①「ドングリと聞いて、人によって違ったイメージを持つ」とありますが、これはなぜですか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 ドングリは全国に広く分布しているものだが地域によって見られる種類がすべて違うから。
- 2 ドングリという呼び名は様々な種類のものをなじみやすいことばでまとめたものだから。
- 3 ドングリという呼び方は東日本特有のものであり西日本では別の呼び名がついているから。
- 4 ドングリとはクヌギのことだという一般的な認識が時代とともになくなってきたから。

問3 — 線②「縄文人が有用な植物資源として目を付けた」とありますが、その理由を説明した次の文章の空らん 1 ・ 2 にあてはまることばとして最もふさわしいものをそれぞれ文中から漢字二字でぬき出して答えなさい。

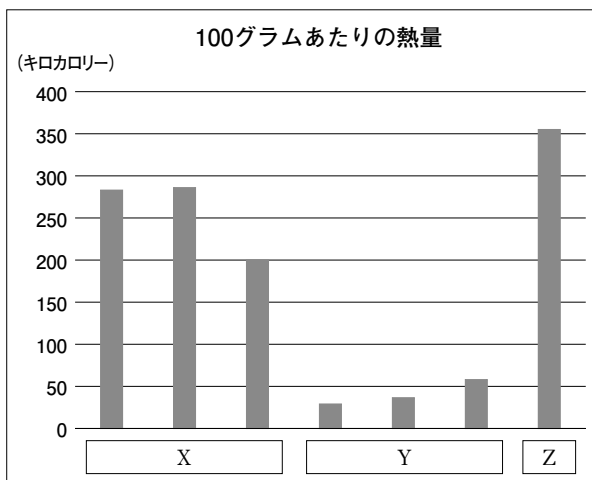
ドングリを実らせるブナ科の植物は、日本列島の多様な環境に合わせて多くの 1 が植生しており、さらにその森林のなかの最も 2 な樹木となっているから。

問4 — 線③「採集が狩猟や漁撈などと比べて簡便であった」とありますが、これはどういうことですか。その説明としてふさわしくないものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 採集には弓ややりなど多くの道具を準備する手間がかからないということ。
- 2 採集には行動したけれど収穫がなかったという日が少ないということ。
- 3 採集には一人一人が特別な能力を身につける必要がないということ。
- 4 採集には獲得した食材の保存方法を考える必要がないということ。

問5 左下のグラフの空らん X 〃 Z にあてはまる食料の組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- |   |         |         |         |
|---|---------|---------|---------|
| 1 | X ドングリ類 | Y 精米    | Z 貝類    |
| 2 | X 貝類    | Y ドングリ類 | Z 精米    |
| 3 | X ドングリ類 | Y 貝類    | Z 精米    |
| 4 | X 精米    | Y 貝類    | Z ドングリ類 |





2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

屋上に続く階段へ向かうと、果たして低い話し声が聞こえてきた。久志と奏子の声だ。

踊り場の下でしばらく立ち尽くした。決意と弱気がせめぎ合う。二人が何を話しているのか、遠くで聞き取れない声に聞き耳を立ててしまう。

——いいから踏み出せ！

心で叫んだ言葉の終いが強い息になって漏れた。二人を見上げる踊り場に、それこそ躍り出る。二人は階段のつぺんに並んで座っていて、久志が先にこちらを向いた。一瞬、意外そうに目をしばたたき、それから眼差しが笑みを含む。「1」

奏子は遅れてこちらに目を向け、三田村を認めた途端に眼差しが険を含んだ。——怯むな。

「カナちゃん。俺、話したいことがあるんだけど」

「何ですか？」

「多分、俺、カナちゃんと行き違っちゃってるよね」

「気のせいじゃないですか？」

奏子が立ち上がって階段を下りようとしたその前に、両手を広げて立ち塞がる。

「気のせいじゃないよね。ちゃんと話そうよ」

奏子は鬱陶しそうに溜息をついた。その溜息の音色に心がくじかれる。だが、三田村は広げた両手を下ろさなかった。

「ちゃんと話したいんだ」

「何を？」

「どうして俺がカナちゃんに壁作られちゃってるか」

カナは面倒くさそうに三田村から目を外した。

「いいじゃないですか、別に。百人以上も人がいて、全員と仲良くなれるわけじゃないでしょ。大人なんだから割り切りましょうよ」

「俺はカナちゃんを割り切りたくないんだ」

「何で？」

「俺はカナちゃんの副担当だから」

はあ？ と盛大に苛立つ声とともに、奏子の視線がこちらを向いた。怒りの籠もった眼差しに貫かれて、却って気持ちが奮い立った。

気のせいですよと素っ気なく逃げられるよりマシだ。お愛想の笑顔でお行儀よく三田村先生と呼ばれるよりも。

率直に苛立ちをぶつけてくる今だけは、壁は取り払われている。

「慎平ちゃん、ガンバー」

からかうような声かけに、奏子がキッと目を剥いて久志を睨みつけた。「茶化さないで！」と、

——だが、久志の気軽そうな声は三田村にとっては心強い声援だ。

「俺がカナちゃんの副担当じゃなかったら諦める。子供たち全員に好かれる自信なんかないし。でも、副担当だから。いざというときは俺が和泉先生の代わりにならなきゃいけないから」

「和泉ちゃんの代わりになれるなんて思っ  
てないよ、でも代理は務めなくちゃいけないから」

「代わりになれるなんて思っ  
てないよ、でも代理は務めなくちゃいけないから」  
懸命に奏子の苛立ち混じりの視線を受け止める。

「ほんとに合わないんだったら、配置換えとか考えてもらわなきゃいけないし」[2]

現実的な提案に、奏子は少したじろいだようだ。そのたじろいだ隙に切り込む。

「カナちゃんにとってここは生活の場所だろ。それなら、嫌いな人は一人でも少ないほうが気分良く暮らせるだろ」

十七歳の高校生が言ったことをそのまま真似っこだ。だが、なりふり構っていられない。奏子に届きそうな言葉なら何でも借りなくては。

「それに、俺はカナちゃんと仲良くなりたいんだ」

「けっこうです」

返す刀でばっさりだ。だが、奏子が苛立つにつれて話は核心に迫っている。

「わたし、別に仲良くなりたくないから」

「何で？」

「偽善者は嫌いな」

偽善者という言葉はもちろん知っている。だが、その言葉が自分に向けられたことなど今までない。そういう意味で、自分はこの言葉を知らなかったのだと思った。

自分に向かって投げつけられたら、どれほど気持ちをえぐり取られる言葉なのか、今まで全く知らなかった。

えぐり取られて、気持ちの背骨が軋んだ。——どうしてこんなこと言われなきゃならないんだ。いくら相手が施設のかわいそうな子供でも、こんなことまで言われる筋合いは、

「……偽善者って、どういう意味」

呻くように押し出した言葉は、自分で思っていた以上に音階が低かった。その低さが自分の堰を切りそうになる。

奏子の挑みかかるような表情はそれを待ち受けている。その凶暴な顔つきが誘う。荒れ狂った三田村の気持ちに、そのまま堰を切れと——

「どうしたの！」

鋭くその場の空気を打ったのは、和泉の声だった。振り向くと、階段を駆け上がってきた和泉が、息を切らしてこちらを見上げている。

凶暴に誘っていた奏子の表情が明らかに怯んだ。どうして、と咬く形に唇が動いた。[3]  
まるで答えるようなタイミングで、今度は久志の能天気な声だ。

「俺、俺。今呼んだ」

手に持ってひらひら振るのは携帯だ。どうやらメールを打ったらしい。

「カナと慎平ちゃんが激突中って」

「ヒサちゃん！」

奏子が久志に食ってかかる。

「どっちの味方なの!？」

久志はヘラヘラ笑っているだけだったが、三田村には分かる。——カナちゃん、ヒサは絶対にカナちゃんの味方だよ。ただし、最終的に。

奏子が息苦しくならないために、今食ってかかれることもヘラヘラヒラヒラかわしてのける。〔4〕

「三田村先生、どういうことなの」

和泉が階段の二段下から三田村の袖を掴んだ。

きつく掴んで引く重みが、まるで錨のようだった。

この揺るがない声が言った。

子供たちは、試しているのだ。甘えたり反発したり、いろんな手札を切りながら、大人がどう出るかを観察している。

① 敵か味方か見極めようとしている。

そして、同じ声がこうも言った。——揺らがないようにね。

袖を掴んだ和泉の手が、様子を窺いながら離れていくとする。その手を引き止めるように、掴んだ。完全に無意識だった。手の中に温みが生じたことと、その温みが驚いたように強ばったことで、自分が手を取ったと気づいた。

和泉は身じろぎはしたが、手を引かなかった。それに甘える。

お願いします、力を貸してください。

俺が揺らがないでいられるように、錨のようなこの手を貸してください。

「偽善者って、どういう意味」

② 同じ言葉を繰り返したのに、音階は全然違った。フラットに。フラットにフラットにフラットに——どうして彼女がその言葉を使ったのかを探り出せ。

「そのまんまの意味だよ」

「どうして、俺を偽善者だと思ったの」

奏子はふいと横を向いた。だが、振り落とされるものか。

「教えてよ。本当に分かんないんだ。どうしてカナちゃんにそう思われちゃったか分かんないんだ。だから教えてほしいんだ」

奏子は答えない。だが、堰を切らせようと誘う凶暴さはもう失せた。

「俺なりに子供たちの支えになりたいと思って施設で働こうと思ったんだ。俺は、カナちゃんの

ことも支えたいよ」

「先生の自己満足に付き合う義理ないから！」

一方的な弾効にまたしても気持ち揺らぐ。自己満足。偽善者よりは「知っている」言葉だが、やはり自分に投げつけられるとえぐられる。

掴んでいた和泉の手を、すぎるように握りしめた。

「何で俺のこと自己満足だって決めつけられるの」

「動機が薄っぺらいじゃない、ドキュメンタリー観たからなんて」

テレビに影響されて、というのは言われてみれば確かに薄っぺらさを免れないように思われて怯む。だが、

「テレビで施設を観たのがきっかけって先生は他にもいるよ」

援護射撃は和泉から来た。

「荒木先生だって、高橋先生だってそうだよ」

二人とも三十代半ばの男性で、和泉よりキャリアの長い職員だ。

「荒木先生と高橋先生も薄っぺらいの？」

「そうじゃないけど……」

奏子がふて腐れたように横を向く。

③「どこが違うの」

思わず一步踏み出した。同じ男性の先輩職員と自分とで、奏子が一体何を分けたのか。それが知りたい。

「他の先生は、わたしたちのことかわいそうな子供なんて言わない！」

叩きつけるような声に、自分の言葉が一気に巻き戻った。——初日、洗濯物を畳みながら。

初めて会った奏子に、志望動機を話した。

ドキュメンタリーの中で、結婚退職する女性職員に泣きながらすりすり子供に心を打たれた。魂を振り絞るような、獣の咆哮のような泣き声。——すごくない？

親に捨てられた子があんなに懐くなんて。実の親に裏切られてるのに、赤の他人とあんな関係が作れるなんて。

素直な感想を分かち合いたくて訴えた。

俺もあんなふうにかわいそうな子供の支えになれたらなあって。——それは奏子の耳にはどう響いたのか。

こう響いたのだと遅ればせながら思い知る。

「施設のこと知りもしない奴に、どうしてかわいそうなんて哀れまれなきゃいけないの!! ——どうして、」

奏子が言葉をやめた。言葉が見つからないのではなく、言葉が溢れすぎて却ってつかえたのだと分かった。

「かわいそうな子供に優しくしたいって自己満足にわたしたちが付き合わなきゃいけないの!? わたしたちはここで普通に暮らしてるだけなのに! わたしたちにとって、施設がどういう場所かも知らないくせに!」

その普通がかわいそうだと思うのは悪いことなのだろうか。同じ年頃の子供が親にわがままを言いながら気ままに暮らしているのに、規則だらけの施設で窮屈に暮らさなければならぬことは、やはり恵まれていないように思える。

「自分だったらどうなのよ!? その年になって結婚してないなんてかわいそうって初対面の人に決めつけられたらどう思うの!」

いきなり突きつけられた矛先に、ほとんど反射で言い返した。

「け、結婚してないからってかわいそうだとは限らないだろ」

「じゃあ恋人もいなくてかわいそうにね!」

「恋人がいないって何で決めつけられるんだよ」

「じゃあいるの!」

「いないけど……」

「ほーら、かわいそうかわいそう!」

鬼の首を獲ったようにかわいそうだとあげつらわれて、不本意な思いがこみ上げる。別に恋人がいらないからといって不自由は感じていないし、自分をみじめだとも思っていない。

そりゃあ、彼女がいたらいいなと思うことはあるけど――

「わたしたちだって同じことよ!」

まるで目隠しを外されたように、その理屈がすんと腑に落ちた。――施設に入っているからといってかわいそうとは限らない。

ようやく、奏子の苛立ちの糸口が掴めたような気がした。

「分かった、ごめん」

素直に言葉が滑り出た。

「勝手な決めつけだった。施設のこと知りもしないのに悪かった。――カナちゃんたちにとって、施設がどういう場所なのか、教えてくれないかな」

奏子には突っぱねる気配があった。だが、

「カナちゃん」

和泉が一言滑り込ませた。その一言で論じてのけた。

奏子はしばらくふて腐れたように黙っていたが、やがて口を開いた。最初は渋々と。

「……わたしは、施設に来て、ほっとした。ちゃんと毎日ごはんが食べられて、ゆつくり眠れて、学校にも行かせてもらえて……先生たちも、ちゃんとわたしの話を聞いてくれるし。なんていいところなんだろうって思った。わたしの母親は、母親としてはちょっと足りてないところがある人だったから……」

施設に來たいきさつは、副担当なので三田村も知っている。そういう母親でかわいそうだ、と思ってしまう気持ちは止められないが、それは本人に向かって言うことでもないのだろう。

「施設のおかげで普通に生活ができるの。そりゃ、規則とかいろいろあるけど、それは施設なんだから仕方ないことでしょ。普通の家だって門限とか家の決まりはあるだろうし、携帯禁止の親だっているだろうし。規則とか集団生活とかめんどくさいなあって思うときもあるけど、前の生活に戻りたいなんて思わない。施設に不満のある子もいるだろうけど、わたしは施設に入れてよかった。施設に入れなかったらと思うと……」

ぞつとする、と最後に小さく呟いた。

「……ごめん。俺、考えが足りなくて」

奏子にとって施設に入れたことは幸運なのだ。施設のことをよく知りもしない新参者が勝手な思い込みでその幸運を哀れむなど、一体何様になったつもりだったのか。

「それと、ありがとう」

は？ と奏子が怪訝な顔をした。

「カナちゃんが教えてくれなかったら、勘違いしたままで他の子供たちにも接するところだった。ありがとう」

奏子は拍子抜けしたような顔で横を向いた。

三田村の手の中から、掴んでいた温みがそつと抜け出した。まだその手にすがっていたのだと温みが去ってから気がついた。

和泉が階段を上り、奏子に並んだ。そして奏子のおでこをぺちんと叩く。

「恋人がいなくてかわいそう、は大きなお世話よ」

精一杯のおどけた口調はどうやら冗談口のつもりようだ。三田村だけでなく和泉にも無差別攻撃になっていたらしい。

(有川浩『明日の子供たち』より)

問1 —— 線 a 「怯む」、b 「息を切らして」の文中での意味として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

a 「怯む」

- |   |      |   |      |
|---|------|---|------|
| 1 | 険を含む | 2 | くじける |
| 3 | 壁を作る | 4 | 割り切る |

b 「息を切らして」

- |   |         |   |           |
|---|---------|---|-----------|
| 1 | 呼吸も忘れて  | 2 | 怒りをふくんで   |
| 3 | 緊張感をもって | 4 | 苦しそうに呼吸して |

問2 — 線 x 「気のせいですよと素っ気なく逃げられる」ことや、—— 線 y 「お愛想の笑顔でお行儀よく三田村先生と呼ばれる」ことよりも、—— 線 z 「率直に苛立ちをぶつけてくる」ことの方が「マシだ」とありますが、それはどうしてですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 壁を作られている原因をさぐる上で都合がよいから。
- 2 子供たちと激しくぶつかり合う生活を望んでいるから。
- 3 もともと子供たち全員から好かれる自信はないから。
- 4 配置換えという形で現実的に解決すればよいから。

問3 次の文はもともと文中にあったものです。どこに入れるのがふさわしいですか。最もふさわしい場所を文中の「1」～「4」から一つ選び、番号で答えなさい。

どうして和泉ちゃんがここに。

問4 — 線①「敵か味方か見極めようとしている」とありますが、三田村が奏子から敵視される最初のきっかけになった発言を文中から二十五字～三十字でぬき出し、はじめの四字で答えなさい。

問5 — 線②「同じ言葉を繰り返したのに、音階は全然違った」とありますが、どのように違ったのですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 一度目は感情的に、二度目は感情をこめずに
- 2 一度目は攻撃的に、二度目は親しげに
- 3 一度目は冷静に、二度目はもっと冷静に
- 4 一度目は遠慮がちに、二度目は自信ありげに

問6 — 線③「どこが違うの」とありますが、これはだれの発言ですか。次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 奏子
- 2 三田村
- 3 和泉
- 4 久志

問7 — 線④「奏子の苛立ちの糸口が掴めた」とありますが、その内容を説明する次の文の空

らん A ・ B ・ C に入ることばを、文中より A は漢字二字、B は漢字三字でぬき出し、C は最もふさわしいものを後から一つ選び、番号で答えなさい。

奏子にとって施設で普通に暮らせることは A なことなのに、B である三田村が勝手な思い込みでかわいそうなどと哀れんでくることは、C であり不愉快だった。

- |   |           |   |          |
|---|-----------|---|----------|
| 1 | 思い入れがあること | 2 | 思い違い     |
| 3 | 思いあがり     | 4 | 思いがけないこと |

問8 本文の内容を説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 三田村は、副担当として仲良くなるつもりだった奏子から拒絶きぜつされてしまったことがショックで動揺どうよくするが、和泉と手をつないだことがよいきっかけとなり、これからは奏子との関係も立て直していける希望が持てるようになった。

2 三田村は、施設の新人職員としてまだ日が浅く、経験不足だという自覚もあるが、奏子とのこじれた関係を改善しようとした時、かけつけてきた和泉の手をなけば無意識に掴むことによつて、難所を越こえる力をもらおうとした。

3 和泉は、三田村と奏子が衝突しうとつしている現場にたまたま出くわし、引き止めようとして三田村の袖を掴んだところ、三田村がその手をつないできたので当惑とうわくしたものの、手をふりほどこはせずに先輩として協力することにした。

4 和泉は、三田村に手を掴まれて当惑したものの、よく話を聞いているうちに三田村に恋人がいないことがわかったので、同じく恋人がいない和泉の手を掴んできた理由にも納得なっとくがいき、奏子よりも三田村に共感するようになった。

3

次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。なお、かなづかいを改めた部分があります。

蝶ちよう

壺井繁治

あの標本室には  
わたしの死骸しがいが並んでいる  
たくさんの仲間と共に  
ピンで止められて  
喪章もじようの如く静かに

それなのに  
あの痩やせて尖とがった昆虫学者は  
首をひねりひねり  
考えこんでいる  
ときどきわたしの翅はねが  
微かすかに動くので

こいつ  
まだ死にきれぬのか  
太い野郎やろうだ  
それとも  
風のせいかな

そういつて  
昆虫学者はぴしやりと窓を閉めた

ああ、わたしは  
最早もはや生きものではございませぬ  
単いちに一羽の標本の蝶にすぎません  
それでも  
そんなに固く窓を閉められると  
息詰いきづまってしまいます

わたしの謔言うわごとに驚おどろいて  
妻は起き  
静かに窓を開け放った

外は  
花の咲さいたように  
明るい夜だった  
あまりの明るさに

問1 この詩の形式として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 文語定型詩                      2 文語自由詩                      3 口語散文詩                      4 口語自由詩

問2 この詩を前半と後半に分けると、前半と後半のイメージが重なる連は第何連ですか。漢数字で答えなさい。

問3 この詩に用いられていない表現を次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 直喩                      2 倒置                      3 擬声語・擬態語                      4 対句

問4 — 線「あまりの明るさに／泣けて来た」から読み取れる心情として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 寝覚めの悪い夢から解放された瞬間、美しく咲く花にめぐりあえたことに對し思わず感動している。

- 2 「わたし」の生活を犠牲にすることで、自由な日々を過ごすことができている者をねたんでいる。

- 3 外の世界に目を向けたことで、思い通りに動くことができない自らの不自由さを思い知り悲しんでいる。

- 4 息が詰まるような夢を見ている「わたし」に気づいた妻の優しさに対して、涙が出るほど感謝している。

問5 この詩の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「死」を想起させることばを詩全体にちりばめ、内容をイメージしやすくしている。

- 2 心情を直接的に示すことばを多く用いて、「わたし」の内面を表現している。

- 3 細かく改行することで、詩の内容と調和するような軽快なリズムを生み出している。

- 4 「蝶」や「昆虫学者」などが登場するが、「貫して「わたし」の視点から語られている。

4 次の各問いに答えなさい。

問1 次の各文の——線のカタカナを漢字で書きなさい。

- 1 四月から銀行にツトめる予定だ。
- 2 多数の意見にフワ雷同する。
- 3 もらったお年玉を銀行口座にヨキンする。
- 4 職人としての腕をハツキする。
- 5 危険な行為にケイコクを与える。

問2 次の各文の——線部分は慣用表現ですが、それぞれ誤りがあります。例にならって——線部分すべてを正しく直しなさい。

【例】 職場で大事件があり、社内は上や下への大騒ぎとなる。 【答え】 上を下への大騒ぎ

- 1 課長から頼まれた仕事を一つ返事で引き受ける。
- 2 部長はのべつくまなしに怒っているので周りから輦蹙を買った。
- 3 この時期はお客さんがたくさん来るので、寸暇をおしまず働く。
- 4 忙しいのに仮病で仕事をサボろうなんて、そうは問屋がゆるさない。
- 5 あれだけ謝罪をしていたにも関わらず、舌の先のかわかぬうちにまた嘘をついている。

